

令和 6年 6月19日

人吉市長 松岡 隼人 様

日本野鳥の会熊本県支部
支部長 田中忠



人吉市の鳥「ヤマセミ」の生息環境保全と日本一の街づくりについて（要望）

日頃より球磨川を中心とした河川行政と野鳥生息地の保全をはじめとする環境行政に取り組んでいただいていますことに感謝申し上げます。

さて、平成29年3月「人吉市の鳥」に追加指定された「ヤマセミ」*Megaceryle lugubris*は、ブッポウソウ目、カワセミ科の水鳥で、日本全国でも減少傾向にある希少な野鳥です。

九州以北の山麓から山地の溪流に一年を通して生息し、水中に急降下してハエ（オイカワ）やイダ（ウグイ）などの魚を捕って生活するハトくらいの大きさの野鳥です。水鳥の中では食物連鎖の最上位に位置し、環境の豊かさを示す指標となる重要な野鳥です。1つがいのなわばりは、一般的に河川を中心に7 kmくらいとされています。繁殖活動だけを観ても、11月から翌年に向けた巣穴確保を始め、年をまたいで3月までに巣穴の仕上げをします。その後抱卵に入り、ふ化が4月から5月です。育雛を終えて6月ごろに巣立ったヒナたちには、エサの取り方や外敵からの身の守り方などの教育を8月くらいまで続けます。野鳥の視力は人間の6倍とも言われ、周囲の動きや音にも敏感に反応します。特にヤマセミは警戒心の強い野鳥です。

令和2年に発生した豪雨災害前までは、人吉市では人々の生活圏の中で頻繁にヤマセミが観察され、子育てもしていました。そのことは、人吉市在住の会員を中心に20名ほどの協力を得た2009年～2020年までの12年間に及ぶ調査で明らかにされています。その結果を簡単に示した図が資料1です。球磨川を中心とした人吉市だけで、なんと3つがいの繁殖エリアがあります。しかも、A、B、Cのエリアは3 km～5 kmの狭い範囲であり、そこで子育てがなされていることは、人吉市における球磨川の自然がいかに豊かであることを示しています。人口3万人あまりの市でありながら、静かな清流の中で相良藩の歴史と文化を大切にしたい小京都としてのよき街中に、ヤマセミが人々と身近に共存して暮らす姿はとても稀なことです。資料2 全市民の宝である球磨川を中心としたこの共存の姿は、全国に誇れるものであり、世界中に発信できる姿でもあります。

しかし豪雨災害後の自然環境は、4年が経過しようとしても未だ元に戻っていないようで、残念なことにヤマセミの姿は時々観察されるだけの現状です。災害後の復旧と復興に向けた工事が急がれる中で、水系の変化等もあってエサ資源が安定して復旧しない現状や工事にとまなう騒音等も特に野鳥には影響しているものと考えます。ヤマセミについてはA、B、Cの3エリアともに左岸側が主な営巣地となっていますが、特にBとCのエリアは河川沿いの崖を営巣地としていてとても近い距離です。

つきましては、ヤマセミをはじめとする野鳥たちのさらなる自然環境保全と、人々の

生活が自然環境にこれ以上負荷をかけることがないように行政として監視と指導をしていただき、未来をつくる子どもたちや市民のために、「ヤマセミと共生する日本一の街づくり」をめざした啓発と教育活動を展開していただきますよう、以下のことを願います。

記

- ① 行政各所の全職員が、人吉市の鳥であるヤマセミについての生態と現状への知見を共有し、今後も環境保全をめざした配慮ある河川行政に努めてください。
- ② 重要な災害復興工事を推進しながらも、特に球磨川左岸は騒音だけでも繁殖活動への影響が危惧され、工事による騒音や接近等には十分な配慮をしてください。
- ③ 漁業協同組合などと連携して、エサとなる魚の資源量の回復についてモニタリング調査を実施するなど、できるだけ早期の資源回復に努めてください。
- ④ 球磨川は海や湖と違い川幅が狭く、水上バイクや騒音を発するボートなどの使用は音の跳ね返りが強く、ヤマセミの繁殖活動の放棄につながります。また学生のカヌーや歴史ある川下り船などとの衝突事故なども危惧され、安全面からも行政として監視と指導を徹底してください。
- ⑤ 市民にも再度「人吉市の鳥ヤマセミ」を広報誌などでも広く周知するなど、啓発事業等を実施し、「ヤマセミが人々と共に暮らす清流小京都の街」が市民の誇りとなる日本一の街づくりにつなげてください。
- ⑥ 未来をつくる子どもたちにもわかりやすい、ヤマセミをはじめとした水鳥たちの環境保全の案内板等の設置や社会教育と学校教育でも環境保全活動を展開してください。

以上

資料1



ヤマセミの繁殖エリア図（2009年～2020年調査）

豊かな自然あるからこそ

球磨川にたくさんの野鳥

山や丘に囲まれた人吉盆地は、相良郡の町並みが姿を小京都の風情の中に日本三大急流の清流

球磨川が流れ、国営「青井阿蘇神社」が1200年を超える歴史を積み上げています。

ふるさとに誇り、城跡の石垣を駆け上った種やかな流れの川面に目をやると、ツバメが飛び交い、空中の小さな虫を捕らえています。空中生活に適した口ばしは非常に大きく、足は短くて飛ぶときは飛行機のように滑らかに飛べます。子育て真っ最中の野鳥たちは、餌を求めては何度も巣に運んでくると、ゴトゴトと音を立てる流れは速くなり水しぶきがあがります。

くまもと KUMAMOTO とりさんぽ

福岡県産

大きな口で餌をまつツバメのヒナたち



水辺で水を飲むカワラヒワ



球磨川の中流域で生活するイカルチドリ



球磨川を流れる人吉街



▲人吉市営野鳥観察

すると豊かになった流れの源に、ハトより大きなヤマセメが豪快に突っ込みました。なんと羽をくらくらたてて飛んでいきました。鳥の多くは生きている街中で共に生きるヤマセメの姿はとても貴重で、自然環境が豊かであるからこそです。

石が集まった中州では、カワラヒワが夏の陣をつばんでいました。体はスズメくらい大きさを飛ぶと翼の黒色が美しく、短い口ばしは丸くかかって硬い種子でも割ってしまいます。しばしばとすると喉が熱いたまごで水を飲み始めました。まさに涼感に満ちた夏の陣にはしほ見とれました。

その後ろをキョコチヨコとスズメなり大きなイカルチドリが足早に駆けぬけました。県内の大きな川でも中流域に生息するチドリですが、限られた場所ですしか出合えません。小石の間に卵を産んで子育てをしますが、近年は暴雨で急に増水すると卵が流される悲劇もおきています。城跡の下流に立っている石碑には「かわちどり 鳴けば見あそぶ球磨川の源の音たかし雛をそよより」と彫られています。おそらく冬もこの地に生息するイカルチドリのことだと思います。実は、人間の冬は日本で一番野鳥が生息することでも有名です。私が子どものころは、雛の街である「日本のロンдон」と言っていたことを思い出しました。

たゞ、2020年の熊本豪雨では1日の線路も断られ、肥後線の「時勢かわせみやませむ」野も運行できなくなりました。人吉市の鳥はヤマセメ、八代市の鳥はカワラヒワに指定され、市民からも愛されています。一歩ずつの歩みでしようが一日も早い復旧を心から願います。(日本野鳥の会 熊本支部長・田中忠)

ていたので、自の前で売れ狂う高波となった激流は、白頭ヤマセメの雄姿を羨しんでいた対岸の太木をのみ込み流し去りました。小学生のころから川で釣りなどをとって遊んだ私は、少し水量が増えただけでも身動きがとれなくなる怖さを体験して知っていました。みなさんいろいろな体験を通して学び、大切な自分の命は、自分で守ることを親子で実践してください。

いをしていきます。数日たつと上手に飛びまわり、親から餌の取り方や身の守り方などを学びながら成長していきます。私は2020年7月4日の熊本豪雨の時に、家ごと流される恐怖に襲われて避難所に駆け込みました。その日は入吉の美家で、水かさが増す川の様子を感慨に

ほとんどの野鳥は、巣立った後も親鳥と一緒に行動します。巣立ち直後は上手に飛べず地面に落ちることも多いです。そこに私たちが出くわすと、かわいそうと思いがちです。じつは親鳥が近くで見守っているのですが、気づかないでうっかり手をだすとヒナを誘拐することになります。野鳥の会では「ヒナを拾わないで、をスローガンに、できるだけ見守ってもらおう願



まなまの止まり木

ヒナを拾わないで